

○車 橋

金澤橋梁記に、車橋實久寺下とあり。此の橋は、大豆田用水に架けたる板橋なり。此の地邊に水車ありしゆゑに、車橋と呼べり。折遠の板橋なりしかど、大豆田用水を廢し、用水跡も追々埋めたりけるに依つて、今は其の橋も絶えたりけり。

○車の 飴

龜尾記に云ふ。犀川下帯刀町の邊に元車と云ふ處あり。油碓を設けし水車を作りけるゆゑ、車と呼べり。此の地に飴屋あり。車の飴とて此の地邊の名物とす。

○大豆 田

此の地邊は、もと大豆田村の村地なりしゆゑに、惣名を大豆田と呼べり。大豆田村は、石川郡五ヶ庄内五ヶ村の一村なり。按ずるに、此の村地は、いにしへ大豆を作りそめたりしゆゑに、大豆田村とはいへるなるべし。日本紀神代卷に、雉降來、因見粟田・豆田。則留而不返云々。とある。粟田・豆田をば、日本私記云粟田安八不豆田萬女不。と和名抄にいへり。古事記傳に、粟田・豆田・淺茅生・蓬生などの

類、皆その物の生えたる地をいへりとあり。

○大豆田町

元祿九年の地子町肝煎裁許附に、大豆田町・公儀町と並べ載せたり。國事昌披問答にも、帯刀町・大豆田町とあり。按ずるに、貞享二年の六枚町灯明庵由來書に、最前野々市大乘寺之寺中之處、後年大豆田河原へ移轉し、明曆三年六枚町へ再轉す。とあり。されば今いふ大豆田の町地は、往古は犀川の河原なりしを、築き出したるならんか。

○大豆田河原傳話

咄隨筆に云ふ。笠松新左衛門、若き時犀川大豆田河原に首もなき體の有るよし聞きて、夜忍び行きて刀をためさばやと思ひ、夜半の頃獨り行きけるに、折節冬の事なれば、雪降り、道もなく、川除の上を通行しけるに、川端を狐の通りしを見るに、口より火炎を吹出して、石の間なる小魚を取り喰ふ体なり。能く見れば、口よりつく息なりけり。燐といふもの即ち是成るべしと、新左衛門語れり。とあり。按ずるに、右咄隨筆は、享保十二年の筆記にて、笠松氏若き頃の話なれば、貞享元祿以前の事なるべし。昔は倒れ死

の人有りても、假埋にせず。河原などに其の儘置きて親族等に見届けさする舊例なりけん。改作所舊記に載せたる寛文

五年十一月公事場奉行よりの達書に、石川郡入江村領に死人有之。檢使指出し、死骸犀川大豆田河原邊にさらし置候條、存當り之者於有之は死骸見届、公事場まで可及案内。

とあり。笠松氏が云へる大豆田河原の首もなき體といふものも、かゝる死骸なるべし。此の時代は諸士皆武術を心掛け、帯刀の双味をこゝろみると、竊に夜中其の地に至り、刀劍のためしをもなしたりし事知られけり。故に是よりさき、萬治四年三月廿九日の達書に、途中に行倒れ果候者、

又は川流死候者有之刻、猥にためし物に仕儀、堅御停止に候間、其心得組中へも可相觸。とありて、萬治・寛文の頃は、いまだ戰國の餘波にて、諸士の風俗武事を専らとなし、刀劍の双味を知らざれば、帯刀となし難きやうに心得たり。故に微妙公夜話録に、微妙公御手廻の小者共へ脇指を賜はるに、新身をば能くためしをなし遣はずべしと仰せられけるよし見たるにても、そのかみ刀劍のためしをなすを、武士の第一とせし事知られたり。

○淨住寺前

元祿九年の地子町肝煎裁許附に、淨住寺前と見え、國事昌披問答に載せたる金澤町名附には、淨住寺町とあり。此の地、舊藩中は淨住寺の門前地なりしかど、今は大豆田町へ屬せり。

○淨住寺門前騷傳話

微陽兩公遺事に云ふ。陽廣公御家督被成、御在江戸之内、七月金澤淨住寺と云ふ寺門前にて、雜人共騷りけり。其刻小松馬廻組頭大橋又兵衛の組金森平三郎と云ふ者、墓參に來候哉、又は騷見物の爲め罷越候哉、其場に在合ひける處、騷爲制禁小姓廻り番の者罷出でたり。其時分は番頭同伴にて廻る例なる故に、番頭日夏市郎右衛門を初め廻り來り、適ち右騷をば追散らすに、集人共騷動せし内に、金森平三郎も交在之、堪忍難致旨にて刀を抜きける處、足輕共打擲する内、廻り番小姓氏家十兵衛の若黨、刀を抜き平三郎が指に疵付けたり。併し此時平三郎と云ふ事も、疵付たる事も不知、皆々退散す。然るに平三郎小松へ罷歸り、手疵隠し置事も難成、書付を以て斷りけり。微妙公の御聽に達